九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 河内屋与兵衛論

横山，正
大阪教育大学教授

https://doi.org/10.15017/12111

出版情報：語文研究. 42, pp.1-8, 1976-12-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

# 河内屋与兵衛論

## ―『女殺油地獄』の主人公の性格をめぐって―

横山　正

### 一

『女殺油地獄』の男主人公河内屋与兵衛については、従来多くの人々によって論議されてきている。古くは坪内逍遙の「『女殺油地獄』を読みて所感を記す」（『日本評論』明治二十四年）のころから、最近では井口洋氏や近石泰秋氏の『女殺油地獄』論（『文学』四三ノ一〇・『立正女子大国文』五）に至るまで、多くの論が発表されている。井口・近石両氏の分類のように、これらの諸説を大別すれば二種類に分かれ、この作品の筋展開の過程において主人公与兵衛の心状の変化を認める逍遙説とその変化を認めない藤村作氏説（『上方文学と江戸文学』所収「六、女殺油地獄の解釈」）の系統の諸説とになる。即ち下之巻前半の豊島屋でのお吉に対する与兵衛の言葉

　なが〳〵しい親達のしうたん聞て。涙をこぼしました。

その他をめぐっての与兵衛の良心の存在（改心）をも認めようとする解釈と、改心を知らぬ徹底した悪人とみる解釈との対立が見られるのである。

これらの説を通覧してみるに、何れも一長一短があり、いま一つ決め手ともいうべきものを欠いているように思えて仕方がない。はたして近松はこの作品の男主人公として、世間にありきたりの小悪人型または悪に徹した人物を設定しようとしたのであろうか。従来の諸説は何れも、与兵衛をこのどちらかの人物という前提で論じているところに、割切りえないものを残しているように思うのである。この作品の一定部分のみを取上げれば、男主人公の言行も理路整然と説明づけられるが、更に拡大して他の部分を関連させると不統一の矛盾を生ずる場合が多く見られる。この理由を求めて、筆者はこれまで、この作品を繰返し読むに従って、与兵衛には特異性（普通人には見られない特殊な言行）が存在することを次第に強く印象づけられてきたのである。

今までよく言われてきたことに、複雑な、義理で固まった特異な家庭環境（もと手代の義理の父親は先代の妻とその実子とに遠慮し、妻は夫に気がねし、互に義理で固まった家庭事情）が与兵衛のような不良青年・無頼漢を育てあげたという考え方

がある。しかし若しそうであるなら、同じ環境に育てられた兄太兵衛も何故、与兵衛同様のぐれた人物に育たなかったのであろうか。先代徳兵衛が死んだ時、兄の太兵衛は七歳、弟与兵衛が四歳で、共に幼児であったから、同じように育って何の不思議もない筈である。それにも拘らず、兄は立派な一人前の商人に成長し、弟は不良青年になったことは、兄弟それぞれの性格や人間的能力の相違が大きく作用したものと考えなければならない。間接的には環境が与兵衛の性格を助長したことは勿論認めなければならないが、直接的には彼の性格・能力によるものとみるべきであろう。それでは与兵衛の性格・能力とはどのようなものであろうか。以下これについて、作品の面から考えてみたいと思うのである。

## 二

近松の世話浄瑠璃においては、男主人公が恋する遊女は、男主人公に真心をつくすのが普通で、定型化しているが、この作品の遊女小菊は彼女を愛する与兵衛を普通一般の客として以上には扱わず、むしろ軽くあしらって、近松としては異例の描写態度を示している。上巻での与兵衛の言葉の中にも、野崎は方角が悪いと言って与兵衛との同行を断っておきながら、会津客とは野崎参りに来ている。与兵衛もこれを感知して立腹し、遊女にまで侮られ、退け者にされているとの観念を抱いて立腹している。即ち周囲の者皆が自分を侮っているという観念が与兵衛に植えつけられていることを近松は作品の冒頭から例外的に描いている。ところが、小菊に実際に会い、遊女に甘言をささやかれると、今まで小菊を責めようと力みかえっていた与兵衛は忽ちに相好をくずして喜ぶような他愛ない有様である。この両方の場面を原文によって比較してみよう。

ゐなか者にしまけては此与兵衛がたゝぬ。小きくめが帰るを待て一出入と。咄の内から二人のつれ。うで押もんでりきみかけ。鬼共組べきいきほひ也

つれ立て参らぬもみんなこな様のいとしさゆへ。人にそだてられけしかけられ何ンじやの。わしが心はせいもんかうじやと。ひつたりだきよせしみ〳〵さゝやく。色こそ見へね河与が悦喜。ェ忝いとのびた顔付

この両者の間には普通では理解しがたいほどの感情の急転化が見られる。

更にまた小菊の会津客と喧嘩し、泥を投げ合ううち、殿の代参で通りかかった小栗八弥にその泥をかけ、その家来で与兵衛の伯父に当る森右衛門に捕えられ、下向に見つかれば斬られることになると、その場を逃げる方法もわからず、今来た大阪への方角もわからなくなって、同じ油商の妻のお吉に助けを求めて縋りつくなど、その狼狽え加減は常識では全く判断に苦しむところである。ここには全く思慮分別の力を持たない一人の青年のみじめな取乱した姿が見事に描き出されている。

ところが中之巻、河内屋の場では、上巻でこれほど思慮を欠き、性格も甚だ弱い与兵衛が祈禱する白稲荷法印を蹴落し、義理の父にも病気の妹おかちにも激しい暴力をふるう狂暴性を発揮するのである。与兵衛の性格の両極端がここには見られ、そ

の強弱の落差は極めて大きく、同一人と思われない程の変化が描かれている。右の思慮を失ってお吉に対し哀願する場面とこの義父に対する暴力の場面との両方を原文で対比してみよう。

ハア かういけば野ざき。大坂はどちらやら方がくがない。こつちは京の方あの山はくらがりか。但ひえい山かどこへいたらはのがれうと。眼も迷ひうろたへアどうかせう。何とかゞ笠お吉と見るより地ごくの地ざう。ヤア お吉様下かうか。わしや今切らるゝたすけて下され。大坂へつれてゐて下され。後生でござると泣おがむ。

（与兵衛）ムウ よふいふた道しらずめと立あがり。うつぶけにふみのめらし。かたぼねせほねうん〳〵〳〵とふみつくる。……（おかち）年よつたとゝ様めでもまふたら。それは〳〵聞事じやないぞとすがり取付泣わめけば。……（与兵衛）同じくがはとふみふせたり。（義父）やみつかれた妹をふみ殺すかちく生めと。取付てゝ親（与兵衛）はつたとけとばし。腹の入程ふめといふたな。是で腹をいるわいと。顔も頭もわかちなくさん〳〵にふむさい中。

この二つの場の与兵衛は全くの別人としか言いようもないほどの相違である。

これほど猛り狂う与兵衛が母から勘当を言い渡されると忽ちに「此与兵衛が爰を出てどこへいく所がない」と途方に暮れる気の弱さに一転し、やがて悄然と家を去って行く有様である。誠にめまぐるしいまでの変化である。こうした変転極まりない与兵衛の性格を踏まえて下之巻の豊島屋の場で、与兵衛がお吉に借銀を依頼する前後の描写を吟味してみよう。

## 三

『女殺油地獄』の下之巻で常に問題にされるのは、与兵衛が最初からお吉を殺してでも借銀返済のための銀をえようと考え、その与兵衛の考えがこの巻全体を一貫しているか否かということであり、従来の見解には両論があって一致していない。これら両論には、どちらも、かなりの妥当性または合理性を持っていることは勿論であるが、このような一貫した計画性は与兵衛にはなかったと思われ、またそれがないところに、この作品の特徴があり、作者の意図があったとみるべきである。これについて、下之巻の描写を、筋を追ってみたいと思う。

まず与兵衛が脇差を差して豊島屋の門口に来た時の与兵衛の心境としては

一しやうさゝぬわきざしもこよひこじりのつまりの分別。

であり、これには後に彼自身がお吉に言っているように自害するための用意の意味もあったであろうが、場合によっては強制的にでも借銀する時の脅し、或は殺しの道具としての意味も含んでいたことは当然考えられるところである。

ところが豊島屋の門口で口入綿屋小兵衛に見つかり、小平から与兵衛の借銀が義理ある父の責任になると脅され、更に豊島屋に前後して訪れた両親の自分のことでの口説き・愁歎を戸外で立聞いた直後の彼の気持は、親に迷惑を絶対にかけてはならぬということであり、善心に立戻ったのである。これを証する

ものは、お吉に対する与兵衛の「二人の親の詞がしんこんにしみこんでかなしい物」という言葉である。この言葉も与兵衛の本心からのものでないとの見方も従来からあるが、右の言葉に続く「何をかくしませう」以下の与兵衛の述懐は声涙共に下る切々たる訴えであり、哀願であって、この部分の近松の描写には不純な気持は全く感ぜられず、ひたすらに真実を述べて相手の同情に縋ろうとする与兵衛の真心が見事に表現されており、一点の疑念をも読者に抱かせないだけの近松の筆力を示している。念のために、この部分を少し長いが、次に挙げておこう。

何をかくしませう跡の月の廿日に。親仁のほう判して上銀弐百匁。今ばん切にかりました。ャまあ跡を聞て下され。手がたのおもては上銀壱〆匁。かつたかねは弐百匁。あすになれば手がたの通壱〆匁でかへすやくそく。それよりもかなしいは親兄の所はいふに及ばず。両町の年寄五人組へ先様からことはる筈。今に成て此かねのさいかく。泣ても笑ふても叶はぬこと。じがいして死ふとかくごし。是ふところに此わきざしはさいて出たれ共。たゝ今両親のなげき御ふびんがりを聞ては。しんで此かね親仁のなんぎにかくること。ふかうのぬり上身上のはめつ。思ひ廻せば死るにもしなれず。いきてはいられずせん方なさに見かけての御無心ぞや。なければぜひもなし有かね。たつた弐百匁で与兵衛が命をついで下さる御恩徳。よみぢのそこ迄わすれうかお吉様。どふぞかして下されといふめの色も誠らしく。

この時点における与兵衛の本心を疑うことは誰にもできない筈で、お吉も「といふめの色も誠らしく。そうした事も」と思うのではあるが、「かねてのいつはり是も又。其手よ」と考え直して、与兵衛の頼みを拒絶するのである。この場合はむしろ、お吉の方が疑い深い立場をとっている。これに対して与兵衛は「是程男のめうりにかけ。せいどんたてゝも成ませぬか」と一瞬途方にくれるが、忽ち「ハァはあ何ンとせうかりますまい」と心の一分別をする時、与兵衛の心はお吉を殺す決心へと急転する。父母の言葉を戸外で聞き、改心した結果、お吉に真実を打明けて親の難儀になる借銀返済のための銀の借用を依頼して、その本心がお吉に理解されなかったための落胆までは、与兵衛の言動にも筋が通っており、よく理解できるが、それがお吉殺しに直結するところに常人の思考としては飛躍・矛盾があり、不統一がある。（これは後に、親の難儀のみ考え、他人の難儀に気がつかなかったと述懐し、常人の思考としては飛躍・欠陥のあったことを自ら認めている。）即ちこの場でも与兵衛の考えは変りに変るのであり、下之巻においても、上巻や中之巻と全く同じ与兵衛の性格が描かれている。

さらにお吉を殺す時には残虐な行為を行いつつも、心の中ではお吉に対し

こなたの娘がかはひ程。おれもおれをかはひがる親仁がいとしい。かねはらふて男たてねばならぬ。あきらめてしんで下され。口で申せば人か聞。心ておねぶつなむあみだ。なむあみだ仏

と謝罪するような気持で殺したにも拘らず、いかに疑われないための手段であるとはいいながら、横柄な態度で豊島屋を平然と弔問に訪れている。それが最後に捕り手に捕縛されると、与

兵衛は覚悟の大音を上げて

一生不孝放埒の我なれ共。一紙半銭ぬすみといふことついにせず。茶やけいせい屋の払は一年半年おそなはるもくにならず。新銀壱〆匁の手がたかり。一夜過れば親のなんぎ。不孝のとが勿躰なしと思ふ計に眼付。人を殺せば人の歎。人の難義といふことにふつゝと眼つかざりし。思へば廿年来の不孝無法の悪業が。ま王と成て与兵衛が一心の眼をくらまし。……

と、むしろ悟りを開いたような調子で懺悔する。従来この与兵衛の言葉は不自然であると言われているが、この瞬間における彼の偽らざる本心からの言葉とみるべきで、常に変転を重ねる与兵衛の心の、この時点での真実にほかならない。藤村氏はこの与兵衛の自白を「自棄的の自白」（悔悟・懺悔の自白ではない）に過ぎないと言われ、与兵衛の前後不変の「悪」を説かれるが、そうではなく、逍遙が本心から出た懺悔とみる点では筆者と一致する。しかしその本心は安定不変のものではなく、この瞬間においてのみの本心からの懺悔であるとみる点で筆者は逍遙説とは異なるのである。

即ち近松はこの作品全体を通じて限りなく変転する特殊な性格を周到に観察し、それを徹底的に描写することによって、与兵衛的性格の人物像を見事に描き上げ、最後の与兵衛の懺悔的述懐描写によって、男主人公の性格描写を完成したのであった。それでは、このような与兵衛の性格はどのように理解すればよいのであろうか。

## 四

以上見てきたような男主人公の性格は特殊な家庭環境の下に育てられた精神薄弱児的性格の成長の姿であったと考えられないであろうか。兄と同じ環境に育ちながら、弟の与兵衛のみが、こうした不良化した性格に成長したことも、ここにその理由が見出されるのではなかろうか。ここで精神薄弱児的性格ということに触れたが、これについて心理学・教育学方面の報告に少し眼を向けてみよう。

まず最初に精神薄弱の定義であるが、国によって多少の違いがあるので、最も要領よく纏めてある「アメリカ精神薄弱協会」の定義を挙げておく。

精神薄弱は発達途上において発生し、適応行動における障害と結びつく普通以下の一般的機能のものを指す。

上武正二・辰野千寿編『知能の心理学』には非行者の知能に関して、非行は社会的現象であるため、社会的環境の変動と共に非行と知能との関係は何んらかの変動があるとしながらも、一応従来の研究結果の概要を掲出している。その一部分を次に挙げておく。

(イ) 非行群における精神薄弱者の割合は、非行のなかった群における精神薄弱者の割合よりも大きかった。

(ロ) 非行群の知能指数の平均は非行のなかった群の知能指数の平均よりも低かった。

また同書は知能指数の高・低の境界線級（七〇より八九の間）の知能を持つ者に犯罪ないし非行の多いことをも報告して

いる。

次に精神薄弱者の行動・思考などの特性であるが、ウェバー著『精神薄弱児と教育』（現代精神薄弱児講座3『心理』所引による）に精神薄弱児の社会的・情動的特性として多くの条項が挙げられている。その中に

○反社会的行動が頻繁である。

○たびたび問題行動を起す。

という条項が見られる。これは与兵衛の行動が次から次へと変転していき、周囲に迷惑をかける行動が続くことを説明しうるようである。更に同報告には

○親や集団から拒絶されているという意識がある。

○自分や他人に対して責任感がない。

というのがあり、また山梨県特殊教育連盟の調査（松岡武著『精神薄弱児の教育』東洋館版）には

○自己客観視の態度ができていない。

○自主性や自律性に欠けている。

○相手の立場、相手の気持を考えてやることができない。

などを指摘している。与兵衛の場合についてみても、遊女や家族その他から自分が常に冷遇され、退け者にされているという観念を持ち、感情のままに衝動的に、自己本位に考えて次々と思慮の未熟な行動を続けていくが、その瞬間瞬間の本人の心としては、そう思っており、それでよいのであり、自分の心の命ずるままに忠実に動いているのであって、決して作為的でもなければ、嘘・偽りでもなく、その時点では、それが与兵衛の本心・真心なのである。そして捕えられた時の述懐で、借銀のため親に迷惑をかけたくない一心から殺人の被害者となるお吉の立場や気持を考えてやることができなかったことを言っているのも、右の精神薄弱児的特徴で十分説明がつき、与兵衛の不自然な発言でもなく、役人に対し弁解しているのでも決してなく、その瞬間における彼の本心そのものであったのである。

また右の山梨県の調査報告の中には、次のようなものも見られる。

○ちゃらんぽらん、でたらめ、のん気、なまけもので遊ぶことしか知らない。

○むら気。

○無分別なことをやり出す。

○ほめられるとすぐ調子にのってしまう。

これらの諸特性は『女殺油地獄』全体を通じて見られる与兵衛の性格と実によく一致し、思考に一貫性、安定性を欠き、時と共に常に言行が変転する精神薄弱者の特性は与兵衛の人間像の諸特徴そのままとも言いうるのである。

「現代精神薄弱児講座」3『心理』に、親と子供との関係からみた精神薄弱児の性格についての表が掲載されているが、それによると、親の態度が「甘やかし型」である時「それによって作られる子供の性格」は

依頼心が強く、動作ののろい子。自制心がなく、すぐにかんしゃくを起す子。協調性がなく、友達からつまはじきされる子。自己中心的な子。

となることが報告されている。与兵衛の母は表面厳しくても夫に隠れて豊島屋へ与兵衛のための金品を持参するような甘やか

しの裏面があり、父はもと手代の義理ある仲であるため、先代の実子の与兵衛に対しては勿論甘く、この環境の中に育った与兵衛の性格は右に挙げられている諸特徴と殆んど完全に合致しており、兄と異なる与兵衛の性格の成長・形成の原因が精神薄弱にあったことが窺われる。ただ一応社会人としての生活をなしうる与兵衛であったから、精神薄弱の程度は先に引用した比較的犯罪や非行の多い知能指数高低の境界線あたりの軽度のものであったことは勿論であるが、精神的に健全な兄の同環境における成長に比すると、なお、これだけの相違が見られるのである。

右のような時代の異なる他の研究分野の調査を安易に利用することには危険が多く慎重を要するのであるが、与兵衛の性格の解明の場合には、こうした立場から考えることによって、従来問題になっているところも極めて自然に理解できるので敢て利用した。

## 五

ここで近松の『女殺油地獄』における描写態度をもう一度振返ってみよう。近松はこの作品で彼の従来の世話浄瑠璃の主人公の類型を破って、まず遊女にまで軽視される男主人公与兵衛を描き、また少なくとも表面的には家族の者たちからも疎まれていることを意識させ、激しい震幅を以て、その時々の言行が限りなく変転する精神薄弱的性格の主人公を設定し、それを徹底的に描写することによって、近松の鋭い与兵衛像の観察と形象化の成功とを遂げている。即ち近松は、このお吉殺しの殺人事件の脚色において、決してありきたりの犯罪物とか悪人を書いたのではなく、一人の、特殊な環境の中で歪められた甘さの中に成長した軽度の精神薄弱者としての主人公を設定し、そのあるべき姿（性格の統一性・一貫性を欠くという一つの構成を持つ性格のあり方）を克明に描き上げるところに、この作品の特色を出したのである。従って、その主人公には一貫した性格はなく、弱い性格で、その瞬間瞬間に心のままに行動し、思考し、変転していくような性格の持主が不自然な家庭環境や社会の中に醸し出す雰囲気によって作品全体を深刻な暗いものとし、残酷な殺し場に罪もない善意の女性が葬り去られる悲惨さが特異の性格悲劇としての浄瑠璃の高い芸術性を完成したのである。これが男主人公本人の中にひそむ性格の欠陥による如何ともなしがたい悲惨の構成であるだけに、やるせない運命的深刻さをも含んでいるのであった。

近松は犯罪関係の世話浄瑠璃を『心中二枚絵草紙』から『女殺油地獄』に至るまで十一篇書いており、この時代的展開を見ると、大体三段階の展開を示している。このことについては筆者は旧著（『浄瑠璃操芝居の研究』風間書房）で扱ったので、ここでは再説しないが、その最後の段階の中でも最高の犯罪物とみられるのがこの作品である。第一、二期の犯罪物では、犯罪者に殆んど犯意がなかったとするか、悪人を殺して観客に満足を与える形式のものにするか、犯人に犯意や罪悪感の存在は一応認めるが、止むをえなかったとするなど、何らか犯人自身にとっての救いが附加されていた。しかし第三期ともなると、こうした附加はなくなり、犯罪意識・罪悪感が強調されてく

る。こうした傾向の最も純粋化されたものがこの作品である。ここでの与兵衛の犯罪は彼自身の持つ性格そのものから生じたものであり、犯罪悪を弱めるすべての装飾は除去されている。主人公の特異な性格上の欠陥が徹底的に浮彫にされ、そこに発生する犯罪悪が写実的手法によって最高の恐怖にまで描き上げられている（お吉の殺し場）。この殺し場は歌舞伎よりの移入と言われ、凄惨な場面の設定は歌舞伎『九月其暁の明星が茶屋』（元禄十年万太夫座）その他の形式の模倣と思われ、近松の浄瑠璃でもその原型は既に早く『薩摩歌』にも見られるが、これが犯罪浄瑠璃と結びつき、殊にその主人公の如何ともしがたい性格的欠陥と結合することによって、全く救いのない凄惨な犯罪悪へと大きく飛躍し、近松犯罪物の最後にして最高の到達点に達したのである。こうした作風が超近世的、むしろ近代的ですらあったために、当時の人形の表現能力を越え、また当時の観客の持つ悲劇性享受の観賞能力の限界をも越えたために、興行的には不評となったことが頷かれる。この作品が近代劇理論の輸入によって再評価されたのもまた十分に理由のあったことである。

（追記）小論に引用の教育学・心理学関係資料の一部については柳久雄教授の御教示をえた。深謝の意を表します。